

「ご兄弟が多くて、けっこうですね」

そう言われるのが、三度や四度でない。十人以上の兄弟が有って、その十番目の子だと思われるのである。じつさいは、兄が一人居たきりで、つまり二番目である。その兄が五郎という名でもあれば、配合上まだいくらか、よりどころが有るらしく思えるが、兄は勝次と言った。

十郎と命名したのは、町の裏の禅寺の住職である。どういう意味をこめて命名したかわからない。

自分のおぼえている頃のそのボウズは、もうすっかり老衰してしまつて、梅ぼしのように痩せて、本堂のそばの書院に終日一人で坐っていた。ほとんど人と口をきかなかつた。

ダイコクさんとの間に男の子が二人いて、二人とも父親より大きいからだをしていた。とくに長男は、父親の二倍近い大兵で、そのころ中学にかよっていたが、本などまるで読まない。

「おれは満洲に行つて馬賊になる」と言つて、柔道のけいこばかりしていた。学校から帰つてく

ると、きれいに掃除のゆきとどいた本堂に、自分の弟や近隣の子供たちを集めて、ドタンバタンと柔道をはじめ。ハネゴシとかオウソトガリとかトモエナゲと言った種類の柔道の手で彼から投げとばされた彼の弟が、拝壇の前の木魚に頭をぶちあてて、コポツと音を立てたりした。

拝壇の上にならんだ仏像達が、騒ぎの震動のためにすこしずつ歩きだして、しまいに、その顔をおうむけにして、壇からころげ落ちる事がある。それをふせぐために、時々ダイコクさんが庫裡の方から現われて、仏像達の足をつかんで元の位置にもどしてやりながら、いくらかその仏像達に似かよっているところの柔和な顔に、悲しげな微笑を浮べて、息子達の運動をながめていた。

長男は、そこに集まってくる子供たちにも柔道を教えたが、とくに私に教えこむのに熱心であった。当時まだ七つか八つの、やせこけた身体をした私のどこかに、一脈の見どころがあったとみえる。彼の身長のおよそ三分の一しか無い私のからだをムンズとつかみあげ、ストーンと投げとばし——もちろん彼としては痛くないように手心を加えてのことであろうが、しかし彼の手心のいかんに関せず、なみなみならず痛いので、齒をくいしばってがまんしていると、

「これが、竹内流の足ばらいである」と彼は説明する。言うまでもなく、ここに書いたような言葉ではない。「こいが、竹内流の足ばりやたい」と言った式の、つまり、佐賀県佐賀市のナマリでもってである。

彼は中学を卒業するやいなや寺をとり出して予定どおり満洲へ渡った。そこで、どんな仕事に従事していたのか、はたして馬賊になったかどうか、ハッキリした事はわからぬが、四五年後、彼にかんする町の人々のいろいろの噂さがほとんど消えかかった頃、眼もくらむばかりにハデな満洲服をゾロリと着こんで、もどってきた。ところで、その時には、いぜんの快活さは彼の上か

ら消え去り、その服装のはなばなしさとは反対に、ムツツリと引きしまった暗い頬をして、沈みこんだ人物になっていた。私の想像の中にある馬賊を働いてきた男としては私の眼にはうつらなかつた。

「馬賊」の弟である次男も中学を出ると医学校に入学してしまった。住職の息子は二人ながらお経などを全く読もうとしないで父親の寺を捨ててしまった。この禅ボウズの宗教的遺鉢をつごうとする者は居なくなった。

彼はますます無口になり、ますます痩せおとろえた。その梅ぼしのような顔つきは、いつの間にか田のアゼで乾からびてしまった田にしに似た風貌に変わって行った。

この住職を久しく熱心に尊崇していた私の祖母は、「お住持さんなあ偉かけん、悲しがりたりはなさらん。ありや、悟っていなさるとたい」と言った。

## 2

この祖母が、私を十二歳の時まで育てあげてくれた。そして祖母だけが育ててくれた。父の味も母の味も私は知らない。祖母が同時に父であり母であった。また、それにふさわしい、剛毅でもあれば温和でもある豊かな性格を持った老女であった。私は、彼女一人から育てられたことを、さびしく物たらぬ事に思ったことは、その当ても現在も一度も無い。遊び友達が父や母を持ってゐるのを見ても、うらやましいと感じた事が無かつた。私には、はじめから、その事がきわめて

自然な、みちたりた状態であった。一言に言えば、祖母に抱かれた私の幼年時代は全く幸福だった。それほどにこのオトシと言う名の老女は豊かな性質を持ち、そしてその生活の全部をあげて孫を育てたとも言えるであろう。

ただ、肥前鍋島家の武士の娘として生れ、自身も旧藩士の未亡人であった彼女は、その孫をだいに思えば思うほど、「おばあさん子は三文やすい」と言うことわざのあたえる警告に耳を傾け、ややともすれば溺愛に流れんとする自分を、スパルタ式養育法でもって武装することを心がけていたらしいせいがある。かんたんには、それは、らんぼうせんぼんと言えぬ養育法であった。おかげで私は、たとえば、ものごころが附くか附かぬころに、じぶんの意志に反して、腹が張りさける程に水を吞まされたりしなければならなかった。それは、次ぎのような次第であった。

私が生れ、そして育った八戸町というのは、佐賀市の西のはずれにある一本町であって、その両がわの家なみの裏は、すぐに広々とした筑紫平野の水田地帯につづいており、その水田には、深い水をたたえた川や堀がたてよこに無数に入りこんでいる。一本町は、その周囲を水路でもって取りまかれていると言っても、言いすぎでは無かった。夏になると町のすべての子供たちは、蛙や魚のように、そこを泳ぎまわる。チョイチョイおぼれる子があつた。近くに一人も溺死者の出ない夏というのは、珍らしかつた。言ってみれば、泳ぎを知らない子供は、この町で成長する資格を持たなかつた。親たちが、その子らに泳ぎかたを習わせるのにヤツキとなつたのは無理が無かつた。トシ女もその例に洩れなかつた。ただ彼女が私に課した教程は、すこし独創的に過ぎた。それもしかし、そのような方法を案出せざるを得なかつた彼女の苦心の程も察せられ、かつ、

それはいかにも、あの老禪師を尊崇していた彼女にふさわしい教授法であつたと言わなければならぬ。

いかなる教授法でそれがあつたかと言うならば、約六歳ぐらいになつた私を町裏の一番大きな一番深い堀のそばへつれて行き、クリクリとすはだかにし、これはどんな目にあうであろうと、にわかにおドオドしはじめた私の手と足、または首すじと尻をつかむや、目よりも高く差しあげ、堀の水面をめがけて、ほうりこんでしようという、かんたんなものであつた。小さい私は空中に拋物線を描きながらワーツと泣き叫びかけるのであつたが、じつさいに於て泣き叫ぶのは、ドブーンと水中に落ちて沈んだ後になる順序で、とうぜん、泣き叫ぶために開いた口からは、声が出る前に水が入つてきた。苦しいから、手足をバタバタやる。無我夢中であつた。自分でも知らぬ間に私のからだは水面にうかびあがり、つぎに岸の方へ向つて死にもぐるいに力泳(?)している。「えらい！」と賞讃の音がきこえる。もうそれで終りかと思うと、再び私のからだは、仁助の両手につかまれて、さらに水の中に投げこまれる。

だしぬけにここに現われたこの男は、兵たいあがりの町の青年で、当時出かせぎの炭坑夫であり同時にバクチうちであり、炭坑にも行かずバクチもうたない折には、私を肩車にのせて連れあるとき、私がほしいと言うものは、なんでもかでも買って食わせてしようという方法でもって私をかわいがつてくれた剛力の男であつた。祖母は私に水泳を習わせるために仁助をたのんだものとみえる。

私をつかんで水に投げこむことは、何回もくりかえされた。その間、当の祖母は裸かにフンドシだけをしめた仁助——もし私が溺れかけでもしたら、ただちに飛びこんで助けあげる用意だつ

たらしい——と並んで立ち、すでに驚ろき恐れて声も立てないでいる孫の姿を眼に涙をうかべて見守っていた。

かくて私は、他の子供らがひと夏またはふた夏でもっておぼえる例になつてゐる泳ぎ（？）をたった一時間たらずでおぼえた。トシ女は、人間が溺死するのは、人間のからだは水中に沈んでもうために起きるのだから、からだは水面に浮きさえすれば孫の生命は安全であると考えたよ。うだ。それは真理である。おかげで私は現在でも、蛙と同じような手足の動かしがたで水面に八分間位は浮いてゐることが出来る。

彼女の方法は、他の事に於ても、だいたい、これに類してゐた。

当時、彼女と私との二人が、その一部を借りて住んでゐたところの巨大な家は、室の数が二十ほどもあり、近隣の人たちから荒木屋と呼ばれ、長い長い一木町のなか程に、そのウツゼンたる屋根をそびえさせていたのであるが、いつの程よりかこの家にはバケモノが現われるという噂さが立つた。それが耳に入るや、私はすくなからずおびえて、夜もオチオチ眠れなくなつた。すると祖母はある晩、押入れから一ふりの大刀を取りだしてきて、そのドキドキと光るコイグチを切つたやつを私の枕もとにドツシリと置き「なにか出てきたら、これで斬んしゃいよ十郎」と言つた。私は闇の中から現われてくるかもしれないバケモノよりも、頭のそばに光つてゐる刀が気になつて、ながらく眠れなかつた。

だが、このような挿話から、この祖母をゴツゴツの硬派教育者の型に想像する人があつたら、それは彼女を誣しめるものである。教育は教育として、彼女は終始一貫して私を熱愛した。その教育の方針も、あるいは、当時から過度に鋭敏であつた私の神経に対する対症療法のもりであつ

たかもわからない。

彼女は、幼い私を毎晩自分のふところに抱いて寝た。場合によって、そのしなびきった乳房を私の口にふくませさせた。私の手や足を強くさせる事に役立つと思われる食物を貰うために、貧しいサイフをはたいた。彼女と二人での毎日は、私をして父や母の居ないことを寂しく思い起させるスキをあたえない程の、いたれりつくせりのものであった。

### 3

しんけんに叱られたことが、ただ一度だけある。

彼女が死ぬ前年のこと、それまでの彼女と私の生活は、しんせき達から送られてくる僅かな金と彼女の手内職で得た金とでささえられていたのであるが、その前から次第に老衰して今はもう手内職もできぬ彼女は寝床の上に寝ている時が多くなり、貧窮の度はひどくなってきた。小学生の私が看病と炊事にあたった。看病と言っても薬をのむまでも無い老衰のことで、べつに大して骨の折れることではなかったが、たいがいの場合に現金を一銭も持たぬので、祖母の好きなウドンを食べさせてやれないのが、つらかった。なんとかして錢をもうけて食わせてやりたいと思ひ、小さい頭をいろいろにひねった末、その頃その町で流行していた副業の、機械でナワをなう仕事を臨時にやらせてもらって賃金をかせぐことを思いつき、或る小さな工場式にやっている家に行つて頼みこむと承知してくれた。ある晩、祖母には友だちの家に遊びに行くようによそおつて家を抜けだした。

夜ふけまで、けんめいに機械を踏み、私にだけは特別にその晩すぐに渡してくれた僅かばかりの賃金を握った私は、その足で近くのウドン屋へ行った。ウドンの鉢を自身で持って家へもどると、祖母は眠っていた。おこして鉢を出すと、彼女はニコニコしながら食べにかかったが、かねて家中に銭の無かった事を思い出したのだろう、「借りてきたかん？」と言った。いやと私が答えると、ではその金はどうしたのだと問いつめてきた。私はしばらく答えなかつたが、どうせ、かくしおうせる事では無かつたので、ありのままにのべてしまった。聞き終つた彼女は不意に、叫び声をあげ、畳を叩いて怒りだした。ほとんどそれは激怒と言うに近かつた。私が、生れてはじめて彼女のうちに見いだしたものだつた。私はめんくらつて「とうとう、うちのばばさんは、気がちごうた！」と思つた。しかし彼女は気が狂つたのではなかつた。

「男たるもんが、こぎゃん（こんな）むぞうらしい（いじらしい）事ばするもんじゃ無かつ！私あ、お前ば、そぎゃんかふう（そんなふう）には、育てとらん！」

と叫んで、彼女は破れ畳の上にポタポタと涙を落した。ついに、ウドンにはハシを附けなかつた。

私はただビツクリし、そして祖母が泣くので、自分までなんとなく悲しいような心もちで、しかしけつきよくは、なんの事やらわからず、眼をむいて彼女を見つめていた。それがわかつたのは、それから数年を過ぎ、祖母を失い、人生の味をすこしばかり知つた後であつた。そして、それがわかつた瞬間に、亡き祖母の愛情は全身を押し包んでよみがえり、私の眼から湯のような涙がふき出してきた。



その翌年の秋、七十四歳で祖母は死んだ。私の十二歳の時である。

たよるべき人と行く所を失った私は、その冬の或る晩、八戸町の西のはずれを流れる大川の水面に落ちて消えて行く雪を見つめながら、「飛びこんで死んでしまおう」と考えながら、立ちつくしていた。

その時の十二歳の少年には、自殺から自分をこの世につなぎとめて置くだけの価値のあるものは、既に何一つ存在していなかった。死はすぐ眼の前に有って、そこへ飛びこんで行く事はすこしも困難の無い、ごく自然な事に感じられた。ほんのこの間「ばばさん」がそこへ行っている。こわい事はすこしも無かった。だから、ついに決行しなかったのが、かつて祖母と仁助から泳ぎを教えられた時のこと、を思い出して「飛びこんでも、浮いてしまうから、だめだ」と思ったためであるか、又は他のどのような理由によるものか、よくわからない。とにかく飛びこむのやめてブラブラと歩きだし、その晩と次ぎの日を佐賀市内をあても無しに歩きまわる事に費やした。空腹のために歩けなくなつてからは、市の中央にある松原公園内の、市立の図書館に入り、時々おそつて来るメマイをこらえながら、次ぎ次ぎと子供らしい又は子供らしくない書物を借り出しては、読みちらした。

#### 4

これが、これまでの生涯に感じた飢えの第一回目のものであった。

それは、胃を噛んだ。もはや、書物に印刷してある文字は私の眼に入つてこなかった。大至急

なにかを食わしてくる人を捜さなければならぬ。私は兄の勝次のことを思い出した。兄は久しぶり前から、佐賀市の東のはずれの町で大きな土木請負業兼材木商をいとなんでいる伯母夫婦の店に引きとられて、その番頭の一人として働いていた。とにかく、そこへ行ってみようと思いついたのであった。

グーグーと無慈悲に鳴りつづける腹に憤りを感じながら図書館を出て、なるべくならばこれ以上腹をすかせないようにソロソロとその町の方へ歩いて行った。ちょうど、俊寛僧都を小さくしたようなつらがまえと精神状態で、私は伯母の家にとどりついたらしい。兄はるすであったが、伯母は私を見ておどろき、いぶかり、でもよく来たとかんげいの言葉をのべ、しかし出しぬけにやってくるとは、ぜんたいどうした事だと、やつぎばやにたずねかけたが、私は眼ばかりギョロギョロさせてだまっていた。口をきくだけの気力が無かった。伯母はなおも私を見まもりながら、「なにか食うかい？」と言うから、ウンとうなずくと、すぐにメシを出してくれた。私はそれを食いながら、うれしさと悲しさと腹だたしさをいっしょくたにした一種異様の気もちで、茶わんの中に涙を落した。泣き声は出さなかった。そうしてメシを食い終った時には、私は伯母の家に小僧がわりの食客として住むことに、きまってしまった。

この時いらい、飢えは、たえず私を追いかけてくる運命になった。同時にその他もろもろの悲運と苦痛もいっしょになって追いかけてくることになった。追いかけて来るこれらのものは、一度も私を追い抜いてしまったことは無いが、しかしいつでも、かがとの所から三尺と離れたことも無かった。苦しみと悲しみとは、言わば私の肩とスレスレの所に並んで、私といっしょに歩いてきた。祖母から愛されて育った十二歳までの生活がこの上もなく幸福であっただけに、それ以

後のこのような不幸は、実際よりも誇張されて私にこたえた。

しかし十二三歳というピチピチとした年と生命の力は、少年時代から間もなく、置かれた境遇に私を馴れさせてくれた。今や私は伯母の家の食客であり、同時に材木はこびの荷車引きであり、同時に土方であり、一言に言えばクリクリとよく働くところの一人の小僧であった。

二日間の飢餓と浮浪は、ほとんど無意識的にはあるが、てっぺいてきに私に作用した。それを境いにして私は一変した。自分が孤児であることをハッキリと認識した。孤児という言葉の意味するいっさいの事がらの本質を、身をもって知った。そして、その苛烈さに、もう少しで負けそうになった。が、負けはしなかった。そして立ちあがっていた。つまり、おそかれ早かれ、人がだれでも経験するであろう順応——泣いてもわめいても、いやおう無しに自分に迫ってくる境遇への最初の順応を、私はこの時にした。別の言い方をすれば、ハッキリと意識的に生きることが、この時からはじまった。夢のようにウツラウツラと幸福な幼年時代は、祖母の死を境いにして私に終わった。そして、いきなり、意志と労働の少年時代がひらけた。そこには、汗と油と土と材木の匂いがしていた。

その家では、伯父が手びろくやっている材木商の部に数人の使用人を雇っていたが、私もそれに立ちまじって、材木を製材所にはこんだり、売れた柱や板を、市内各所の建築場や大工の家へ届ける仕事をやらされた。一方、土木請負業のために必要な土方が、多い時には数十人材木置場の二階の広い広い土工部屋に合宿している。その土工達のコンクリートの袋をはこんだり、モッコをかついだりする仕事の加勢にも、私はひっぱりだされる。どちらも私にとってには力にあまる労働だった。それをウンウンと齒をくいしばりながら毎日やった。苦しかった。しかし不愉快

では無かった。それまで貧乏の中で、そして貧乏人たちの中で育てられた少年は、その本能で、労働というものがこの世の中でなによりも欠くべからざるものであることを知っていた。また、労働のなかに或る種の男らしい快感が有ることも知っていた。おとなの仲間入りをして働くことで少年らしい誇りも感じていたし、それに、すくなくとも自分がこの家で食べさせてもらう位のものは、自分の力でかせぎ出しているという満足が有った。

はげしい筋肉労働のおかげで、それまで細く弱々しかった私の骨格は、にわかにはシツカリしたものになってきた。土方や人夫たちの生活や気風や言葉使いにも馴れてきた。彼らと同じ部屋にザコ寝をし、彼らと同じようにドマに立ったままでメシをかつこみ、「土方ころすにやハモノはいらぬ」といった式の歌をうたってトロッコを押し、バクチの打ちかたからケンカ出入りの作法にいたるまでのジンジを教えこまれ、はては、馬のキンタマを食わされた。——この最後の事については説明を要する。でない馬のキンタマを食うのが、これら土方や人夫たちの風習であつたかのような誤解を生む。

キンタマを食つたのは、彼らの中の一人で、きわめて善良小心な性質と、ほとんど毎晩寝小便をするという悪習慣とを持った中年過ぎの土方の与七と、それから私との二人きりである。或る日の夕方、現場からもどつてきて夕飯をすませたあと、与七は秘密らしく私を材木小屋の隅につれて行き、

「十郎さんよ、スキヤキ食うか？」と言う。ウンと答えると、よしよしと言いながら、すでにスツカリじゅんびをととのえてグツグツと煮え立っている鍋のかかったシチリンを、どこからか運んできて、さあ食おう、ほかの連中に見つかるよめんどうだから早いとこ食つてしまおうと促し

立てながら、まず自ら肉のひとときれをハシではさんで口の中に投げこんで「うん、うめえ！」と叫んだ。私も食った。噛むと、へんにシヤリシヤリする。なんの肉だときくと、キンだと言う。え、なんだって？ キン？

「うまかろうが？ 馬のキンたい。今の、農事試験所へ仕事に行ったらの、ちょうどあすこの庭で馬のキンぬきがあっていたけん、抜いたやつば、もろうて来た。うまかろうが？ こぎゃんうまか上に、これば食うと、からだが温まって、寝小便の薬になる。こたえられん！ まだドツサリ有るぞう！」

与七はニコニコしながら言つて、その腹がけのドンブリの中からガサガサと取り出した新聞紙包みを開いて見せた。鍋の中の肉は薄く輪切りになっていたから何の肉ともけんとうが附かなかつたが、新聞紙の中には馬のからだの一部分を切り取つて来たままの形と色で一見してそれとわかる異様なものが、十個以上もころがつていた。私たちは、それを横眼で見ながら鍋の中の物を全部味わいつくした。次の晩も与七はスキヤキに招待したが、私は好意だけを謝してこれを辞退した。悪食をいやがつたためでは無かつた。少年ながらそれ位の食物にはへキエキしないだけのドキョウと食慾はそなえていた。正直のことを言つと、このスキヤキはあまり美味で無かつたからだつた。与七の寝小便がこれでもつて快癒したかどうか、残念ながら記憶していない。――

これはホンの一例であつて、多い時には四五十人、すくない時でも二十人からの土方達は、これに似たような、それぞれの方法で私をかわいがつてくれた。彼らは、彼らの「親かた」の義理の甥であるところの十三四歳の少年が――しかもそれが、よるべの無い孤児であることをうすうすながら彼らが知つていたところの少年が、自分たちの仲間の一として生活し労働し、すすめ

られれば馬キンのスキヤキをも食ったりする姿を見ているうちに、深く私にむすびついた。いっぱいんの社会に対しては反逆的で皮肉な彼らが、私に向っては庇護的で善良であった。彼らもまた、そのほとんどが、世の中から虐たげられ捨てられた「社会の孤児」であったせいかも知れぬ。あるいは又、将来の「若親分」として、私を「筋の良い」土方にしたてあげようという気になったらしい形跡もある。それはきわめて素朴で純朴な、いくぶん古めかしい愛情であったが、同時に少々荒っぽいものであったことは、彼らの生活が荒っぽかったのだからやむを得なかった。いや、十四五歳の少年には、その荒っぽさまでが気に入ったのである。当時の私には彼らの間にまじって暮している事ほど自由でたのしい事は他に無かった。ノビノビと手足と心を伸ばし、歌いつつ土や石を運び、彼らと同じ人生観でもって世の中のハシをのぞいた。世の中は、私にとっては、謎と希望とに満ちて見えるようになって来た。

生活と労働のよろこびを最初に私に教えてくれたところの、このあらくれた一群の土方や人夫たち——その中の半分は、いくらかずつ罪悪の影を背負った流れ土方であったが——の中から、今でも私は数人の男の姿や顔を思い出すことができる。

5

一群の組頭みたいな事をしていた清水さんというのが居た。

伯父から信頼されると共に、土工一同からも心服されていた、四十前後の顔色の悪い痩せた男であった。がんらい流れ者で、伯父の土工部屋に「わらじを脱い」でから数年たっていた。どん

なに気の荒いバクチ打ち専門のような土方がやって来て、来てから二三目すると、この男の言う事ならなんでもきく。「学」が有るからだけでは無いようだった。性格に一種の圧力を持った人間のもようであった。

すくなくとも中等学校卒業程度では無いらしい知識を持っていたのは事実だった。現場へ通う途中や、作業場で働きながら、私に英語の初歩と漢文と高等数学らしいものすこしばかりを教えてくれた。若い頃、大阪で人を殺したことがあるという噂さであった。言葉に大阪弁が残っている。無籍者であることは事実らしく、手紙など来たことも自分で出したことも無し、もちろん人が訪ねて来たことは一度も無かった。自分の来歴については一言半句も語らぬ。この男が殺人者であることを、土工たちは信じきっていた。

ところが、彼の人からは、そんな噂さとは全く反対に、柔和——と言いたいが、それを通りこしている。なにか虚脱したように弱々しい。からだつきなど、むしろヨボヨボしたようなかげんだった。人を見る眼は、たいがい微笑をふくんでいて、口かずはきわめてすくなかった。大きな声を出すことなど全く無い。ごくまれに怒った時に、眼の色だけが鋭どくなるが、そんな時でも言葉つきは低くおだやかなものである。それが、へんに凄ごかった。土工達は彼を畏敬していて、彼の言うことにタテを突いたり、けんかをしかけたりする者は一人も無かった。

皆の中に居ても、仙人じみた静けさをからだのまわりに漂わせ、スコップを動かしたり、モッコの数をかんじようしたりしながら、そばに働らいている私に、低い声でボツリボツリと、「世界」について語った。彼の話には、はじめも無ければ終りも無かった。不意に、いつの間にか始まっている。そして、始まった時と同じくとつぜん、しかしいつ終わったかわからないよう

に——つまり風が吹いて来て去るように——終った。だしぬけに「老子という人が、こんな事を言っている」といったふうにやりだすかと思うと、地めんの上に円錐形にもりあげたジャリの体積の算出の方法にかんする数学を説明したりした。また、風が強い日には、そのヒヨロリと痩せたからだに着た印バンテンのすそを、その風にハタハタと吹きなびかせながら、私の眼をのぞきこむようにして、空気中の気圧の変化のために風が起きることを、科学的にくわしく説明した。かと思うと自分の足をおおうた、キャハンとジカタビにへばり附いた泥を見ながら永いことだまりこんでいた末に、弱々しい表情をフツとあおむかせて、

「あーよく晴れた。十郎さん、このソラというのは、なんでこんなに青いか？」  
と言う。

私は彼に強くひきつけられた。私は、十三四歳の少年のどんよくさで、次ぎから次ぎと質問し、彼をあいてにして、自然と人間と社会について、無数の事を見たり考えたり感じた。彼の話は正確であると同時に、暗示的であった。彼の説明で一つの事がわかって来ると、その事につながって今度は五つも六つもわからない事が生れて来た。するとそれについて思いめぐらし、次ぎの日に質問した。すると彼は、すこしも飽きると言う事なく、いつも同じ調子で、正確に暗示的に答えた。私にとって、労働と知恵とおどろきに満ちた日の連続であった。

清水さんは、「学校」であった。知識を与えてくれるだけで無く、感情をも養ってくれる学校であった。すこし大げさな言い方をすれば、彼は私に人生の謎のいくつかをときあかしてくれ、同時に、さらに大きなたくさんの謎をあたえてくれた。彼が、どのような理由から、それほどの関心を私に払ってくれたか、ハッキリした事はわからない。私にわかっていたのは、彼の心が限



りなく孤独で寂しかった事である。

少年時代の私に、もつとも大きな影響をあたえた者は、言うまでも無く第一に祖母であり、その次に、この、人を殺したという流れ土工であった。

## 6

つぎに私は兄のことを語らなければならない。

兄が勝次という名であることは、前に書いた。幼年にして友達とけんかして足首をくじいたのが原因で左足の骨膜炎を病んだ。一度なおつたらしく見えたが、すぐに又再発した。腰をおかさ、次ぎに肩をおかさ、しまいに全身的な病気になってしまった。祖母はこれを方々の病院に入院させて治療に努めたが、なかなか全治しない。これに要する費用がたいへんだった。前に書いた祖母と私の生活の窮迫の原因は主としてこれであった。祖母は入院費を作るために祖先伝来の家財道具を売りつくし、なおたらずに諸方の親せきから多額の金を借りたらしいが、それにも限りのあることで、兄の療養生活も、最初の一年は私立病院の二等室におさまっていたのが、次ぎの半年は三等室の患者となり、またその次ぎの二年位は県立病院の、「下等室」——つまり実費療養患者ばかりの、五十畳位の室にベッドが四十八個ほども並んでいる病室の一隅に吟呻するといったふうの、やむにやまれぬ下落ぶりを示した。さらに四年になり五年になる末には、祖母と私と兄の三人の食費にも事かくありさまとなり、病院に支払うべき実費をひねり出す方法もつきて、病院から退院を迫られた。さいわいな事に、その頃には兄の全身をかけめぐって暴威をふ

るつた骨膜炎もだいたいに於て下火となつていたので、発病以来五年目に彼は退院して来た。その時には、彼の左の足は右の足よりも二寸ばかり短かくなり——早く言えばビッコになり、左の肩には大量のホウタイが巻きたててあり、ばかりで無く病気のどうかげんであるか右の耳が全くきこえなくなつてゐるありさまであつた。まるで「廢船」だつた。

しかし、げんきは良い。もともと、たいへん明るい生れつきだつたのが、ひどい病苦に永い間いたためつけられてゐる間に、普通の人とは反対に、むてっぽうな位に明るいノンキな人間ができあがつてしまつた。スネの骨をノコギリで引き切られたり、又は腰の骨にゴムのくだを貫き通されたり、多い時には一月に三度も四度もコロホルムをかがされたりするよゝな病苦を五年間も背負わされた後では、人によつては、暗い性質になるかわりに、ノハウズに明るくなつてもう事もあると見えるのである。この廢船は、人生に於てくつたくするといふ事を知らなかつた。また、戦うことをやめなかつた。もともと彼が骨膜炎になつた原因が十三歳の時の喧嘩なのであるが、十七歳になつて退院して来た翌日には既に喧嘩をはじめてゐた。まだ突いてゐる松葉杖をふるつて、近隣の悪童達とわたり合つた末に、その松葉杖をコナゴナに折られても、「おりよう！（おやおや）折れてしもうたあ！」

と笑つてゐた。祖母も、さすがに行く末が案じられたと見える。年も年であるし、ましてカタワであつてみれば、今の内に何か職をおぼえさせて置く必要があると、いろいろに思案したあげく、ついに意を決して、父方の伯母の家の、材木部の番頭見ならいに往みこませる事になつた。だから、祖母が死んで、私がおなじ家にころげ込んで行つた頃には、兄は既に押しも押されもせぬ材木屋の中番頭として、ビッコを引きながら活躍してゐた。彼は久しぶりに私を見ると、声

をあげてよろこんだ。あわててポケットに手を突きこむと、そこに持ち合せていた多分材木の小売代金の一部であろうところの三四個の五十銭玉を私の手に握らせて「マンジュウを買って食べ」とささやき、その明るく、あいきょうの有る顔で笑みこぼれた。

私は彼の事を思い起すたびに、この男は一種の天才か又はそれに近いものではなかったろうかと思う事がある。たとえば、彼は骨膜炎のための入院と、それ以前からの病身のため、小学校も正味二年位しか通っていない、教育らしい教育は何一つ受けていないのにかかわらず、いつの間にか読み書き算数その他なんでもやれるようになっていたばかりで無く、それらをかなり高い程度にまでやれるようになっていた。一例をあげると、杉の丸柱かなにかの三間も四間もの長さの材木で、根もとと梢のところではひどく大きさのちがったやつ全体の容積をソロバンで算出する仕事は、なかなかむずかしく、でも材木商にはぜひ必要な仕事だそうであるが、この「才取り」

——たしかその店ではそう言っていたように記憶している——を、兄はこの店に住みこんでから一ヶ月位の間に、べつに誰から習うと言う事も無く、自分流のやり方でドシドシやれるようになっていた。万事がその調子であった。べつに努力してそんな知識を習得しようとしていたらしくは見えない。遊び好きで、いつもノンビリと、にぎやかにしていた。よそ目には、とくべつに鋭い所などまるで見えない。それでいて、その智力と感情は、おそろしく強烈で敏活であった。いつ頃から、どんなわけあいで、どんな所から脈を引いてそうなったのか、全くわからなかった。そのようなものを自分のうちに育てあげる空気などが、彼の周囲に有ったとは考えられない。オトナとしての彼の存在に私が気がついた時には、彼はすでにそうなっていたのである。

彼は仕事もよくした。それから女に惚れた。それほど数多くの女に惚れるわけでは無いが、そ

れは実に腹立たたしい程に、又よく見ていると吹き出したくなる程に、まるで「惚れる」という言葉は彼のためにできた言葉であるかのようになり、うつつを抜かして惚れた。また、彼に惚れられた女たちが、どういうものか、打てばびびくように彼を好いた。なるほど男ぶりは、現在たった一枚私の手に残っている彼の写真を引きだして見てもわかるように、かなり良い方で、まず十人並以上と言ってもよいであろう。しかし前述の通り、ビッコで、左手はきかず、片耳はつんぼである。金にしても、せいぜい材木の売りあげの中からクスネたやつを運んで行く位のもので、タカが知れている。

彼自身が女に惚れこむと言うのは、いくら惚れっぷりがミゴトであっても、性質だと思えばわからない事はないが、相手の女が同じように彼を好くという事実は、はじめの間は人々から信じられなかった。それが、いろいろの確証によって信じられるに至ってからも、伯父も伯母も店の者達も土工部屋の土工達も、これをフシギとした。しかし、男が女を好いて、同時にその女が男を好いて、しかも男が店の金をチョロマカして女のもとへ通いつめるとなると、大人はフシギがってばかりは居られなかった。たちまち「どうらく者」と言うゴクインが押されて兄の上には伯父伯母その他の手で、そうおうの弾圧が加えられることになった。兄は、しかしそのような事には意に介さないかの如く、シャアシャアとして放蕩を中止しなかった。弾圧は甘んじて受けたが、しかし深く苦にはしなかった。自分がなさざるを得ない事をなすにあたってとうぜん引き起さる、やむを得ぬ故障として考えているらしかった。その態度はてつて的にスナオであると同時に、いや、スナオであればあるほど矯正すべからざるシブトサとも受けとれた。それはちょうど、自分のほしい物を取るために駆け出した幼児の姿に似ていた。またレイルの上を走る列車が、雨や

雪に叩かれても、スナオにそれを受けながら、でも走る事をやめない姿に似ていた。

また、兄の相手の女は、ほとんど芸者その他の商売女ではあったけれど、正確な意味で「放蕩」と言えるかどうか、わからなかった。と言うのは、彼が惚れて通いつめる相手の女は、いつでもその半年なり一年なり二年なりの間は、ただ一人の女であって、あちこちの女たちを同時に好きになるという事は、たえて無かった。その点は、実にアツケない位に、よそ目には単調きわまる行為であった。彼は、人から何と言われようと、自分だけの気持では、言うところの「放蕩」をしていると言う意識は持っていなかったようである。そうでなければ、あれほどに落ちつき払い、あれほど自然に、あれほど変りなく一貫して、女たちのもとに通いつめると言う事は、できるもので無いように思われる。そのありさまは、むしろ、自らの行為に全き自信と權威を持てるものの如くであった。一種の天才か又はそれに近い者ではなかったろうかと彼の事を私が思う理由は、このへんにもある。

7

兄の女の一人を、私は見たことがある。

その時、私は大ぜいの人夫達にまじって、伯父の家の前を流れている大川から、材木の水あげを手つだっていた。日田の山奥から筏にして流して来た杉や松の角材を水の中でバラバラにほぐして、一本々にトビクチを打ちこんでは、川岸に引きよせる。それをかっぎあげて、川ばたに積む仕事である。着物を着ていては濡れてしまうので、人夫たちはフンドシだけの裸かで、いせ

いのよい掛け声をかけながらグングンと働く。水にぬれきった角材は、重い。小さい私には荷が勝ちすぎるのだが、オトナに負けまいとして歯をくいしばって動きまわっていた。そのうち、一つの視線が自分にそそがれているのを感じてヒョイと眼をやると、すこし離れた川ばたに立ちどまって、こつちをジッと見ている若い女がいる。子供の眼にもシロウト女とは見えない風態で、背のあまり高くない、柔かくふとったからだつきだった。はじめ通りがかりの芸者かなにかが、材木水あげの光景を珍らしがって眺めているのだと思って気にしなかったが、女はいつまでも去ろうとしない。私が女の方を見るたびに、白い顔をほころばして微笑している。馴れ馴れしすぎる。フンドシだけの私のからだ中が、ムズムズするような気がして来た。そこへ、それまで材木部の店の奥に居たらしい兄が、小走りに駆け出して来て、女をつれて、どこかへ消えてしまった。私はホッと安心すると共に、ホンのすこしばかり失望に似た気持がした。察するに、彼女は兄に逢いに来て、彼が出て来るのを待っている間に、かねて兄からの話だけでは知っていたであろう弟の私が、スツパダカになってクリクリと働いている姿を発見して、「ああこれが——」と思いつながら眺めていたものであろう。その眼つきがアカの他人を見ている眼つきではなかった。私はその女の顔を忘れない。それは、兄が次ぎから次ぎと愛した女たちの代表者のように私に思われた。ポテリとした白い顔に深い情感をたたえて、私にはなつかしいと同時に、うらめしい姿であった。

兄は店の売あげ代金をくすねこんでは使う。時によると、どうにもゴマカシのきかない大穴をあけることがあった。ふとっ腹の請負師の伯父は見えて見ないフリで黙っているが、伯母は自身的身内のことで、夫に対する義理合いからも、これをやかましく制止し、怒りたて、はては現金出

納の権利を兄の手から奪い去った。しかし兄はそれにもへこたれる色を見せず、大番頭の目かすめては、材木をベラボウな安値でゴツソリと抜け売りをしたりして、夜になると女の居る町の方へ駆け出しして行った。伯母はこんどは私をつかまえて泣きごとを並べる。

兄も私もそれぞれ一人前に働らいているとは言え、けつきよくこの家にやっかいになっている境遇であつてみれば、「伯父さんに義理が悪い」と泣くようにしてくりかえされると、私も伯父や伯母にすまない気特になった。ついに私は兄を説伏しにかかった。つまり十三歳の少年は勇気をふるい起して兄に向つて女ぐるいの意見をやる事になった。しかし、伯母の言い方を以てすれば「気のちがったアホタレ」であるところの兄の恋愛について、私になんの有効適切な事が言えたであろう。ただもう私はせい一杯に両眼を怒らせて相手の顔を睨みつけ、

「もう今夜から家を出て行ったら、いかん！」と声を張りあげて言った。兄は私の顔を珍らしい物でも見るように打ち眺め、「うん、もう行かんよ」と答えた。そして日が暮れると、アツと言う間に彼の姿は消えてしもうのであつた。ほとんど付ききりで彼のそばに張りばんをするようにしていても同じ事だつた。それはまるで遁身術の一種でもあるかのように、変幻をきわめた。度かさなるにしたがつて、私は、ほとんど感服した。しかし更に、女の魅力というものは、それほどまでに甚だしいものであるうかと、あきれかえつた。しかし、又さらに、これが度かさなるに及んで、伯母と同様に本気になつて腹を立ててしまったのも、やむを得ない。私はついに腕づくでも兄の色町がよいを阻止する決心をかためた。

ある晩のこと、ソツと家を抜け出して行く兄を尾行することに成功して、その色町近くまで行った事があつた。彼は、家々のあかりに所々照し出された街の片側をビッコを引きながら歩いて

行くのだが、心はすでに女の所に在るのであろう、スタスタとおそろしく早い。その一步は高く一步は低くなる後姿を見るにつけても「このチンバの助平め！」とばかり十三歳の正義派の怒りが燃えた。色町への曲りかどの所でヤツト追いつくや、かなわぬまでも組みうちをしてやろうと腕をまくりあげて声をかけた。兄は、へんな顔をしてこつちをすかして見たが、それが弟であることを認めると、チョット困った様子だったが、たちまち「ああお前か、エツへへ」と笑い出し、「何かうまい物、食わしてやろか。チャンポン食うかん？」と言った。

私は返事をしなかった。

「腹あ、へつとろうが？ おれも腹のへった。食おう。一番上等のチャンポンば食わせてやろう」兄は私の背を抱くようにして、ちょうどその街角に有った小料理屋にひっぱりあげてしまった。なあに、そんな甘い手に乗るものか！ 私はそう思いながら、唇を嚙んでいた。やがて上等チャンポンが眼の前に出た。これを食べたらいかんと私は思い、しかし、そのうまそうな匂いにノドがグビグビ鳴るのは、いたしかた無く、それを兄は見すましていながら、そのような事にはまるで気が附かぬような調子で、

「これを食べたら、おれもすぐいっしょに家に帰るから、ともかく食つちまおう」

そうだ、それなら食ってもよいではないか、どうせ食っても食わなくても金は兄が払うのだから、なあに、これを食べてもこちらが軟化しなければよい……。私はそう思った。それに、昼の間、おとなの間に立ちまじって一日労働をしている十三の少年の食慾を、この場合、かんじように入れなければならぬ。私は食った。うまかった。そして勝負は私の負け。夢中になってチャンボンと闘っている間に「チョット便所に行つて来るからな」と席をはずした兄は、ついに再び



姿を現わさかった。逃げられた！　と気が付いた時には私の胃袋は気もちよくふくれあがっていて、もはや既に兄を追跡しようという闘志は燃えあがらなくなっていた。最初のすこしばかりの贈り物をツイ受取ってしまったために、ズルズルと罪の深みにおちいつてしまった収賄犯人の心理を私は味わったわけであった。

ところで、兄の骨膜炎は、だいたいに於てなおっていたのであるが、しかし全治していたわけでは無いので、季節の変り目などになると、突然に高熱を発して脚などの患部が化膿する。そんな時には、さすが物に動じない兄も、四五日間というもの、その痛みに七転八倒の苦しみをかたをされた。そのあいだ、ほとんど食物も食えず、もちろん、女の事を思い出しているゆとりも無いらしい。患部はまっ赤に腫れあがってしまったって脚は平常の四倍ほどの大きさになった。彼は唸り、ころげまわり、ワーワーと号泣した。しかし、ふだんがふだんであるために、伯母は良いキミだとばかり、医者にかけてくれようともしなかった。伯母以外の家人も、伯母や伯父のおもわくをはばかり、進んで看病してやろうとする者は無かった。皆が、病気の性質に馴れてしまっていて、病人がどんなに苦しがついても、患部が化膿しきって膿さえ出してしまえば、生命に別条は無いことを知っていたせいもあった。

すべての者から見捨てられて悲惨のかたまりのようになった彼は、土工部屋の一隅にころがって五六日間泣きわめくのであった。

「十郎さあん、十郎さあん、痛かばい！　ウーン、痛かばい十郎さん！」

と叫び立てた。そういう時だけは、ただ一人の肉身である私を多少のたよりにしているらしい事がわかった。しかし、いくら十郎さんと言われても私にどうしてやる事が出来ただろう？　呆

然として彼の枕もとに突っ立って、眺めているばかりであった。心の中では、いくらか「いいキミだ」と思う気もちも有るし、そうかと言って、こんな苦しみをなめている兄が、かわいそうでもあるし、それにしても、メシも食わずに居るやつが、よくもこんなに大きなわめき声を続けざまに出せるものだと感じた。ところで、それほどに苦しみながらも、永年かかる難病と闘って来た功はえらいもので、彼はその苦痛のさなかにも、患部の腫れあがりかげんをチャンと測定していた。五六日たって脚が適度に化膿し終ると、

「十郎さん、トイシを持って来てくれ！」

と命ずる。そして、枕の下から取り出した肥後守のナイフを砥ぎはじめながら、ダッシメンとホウタイとヨードフォームを買って来てくれると言った。それらいっさいを、相変らず号泣し唸りながら言うのであるが、しかしその言葉の内容は、あたかも、これから外科手術の執刀をしようとする医師の如く冷静なものであった。私が菓屋に走って行き、それらを買いととのえて戻ってくる、肥後守は砥ぎあがっていた。すぐに手術がはじめられた。と言っても、それは甚だかんだんなもので、そのナイフを、まるでガラスのトクリのように膨れあがった患部に、サッと突き立てるだけである。膿が、ほとばしり出た。ビックリする程たくさん流れでた。それが出さえすれば痛みが去ることを知っている彼は、まるで子供がキャラメルをもらってよろこぶような笑い顔で、「これでよか！ これでよか！」と叫びながら、パクリと開いたキズぐちにヨードフォームを振りかけガーゼを詰めこみホータイを巻く。じつに馴れたものであった。その場から熱が引いてしまった。夜になる。幾日もの間、あれほどの痛みに苦しめられ通し、食物も睡眠もロクに取っていないのだから、まさかと思う。しかし、たちまち彼は、イソイソとして女の所に飛び

だして行つた。私はその後姿を見送りながら咏嘆した事が、なんどあつたか知れない。その夜が月夜ならばその月光に照し出されながら、その夜が雨ならば雨傘の下に。ふだんからのビッコが、今日の昼間切開したばかりのキズの痛みのために、とくに甚だしくなっている。ビッコを引くと言うよりも、踊りながらと言つた方があつていた。

それは、こっけいとも、あさましいとも、物すごいとも、形容のしよりの無い姿であつた。私はゾツとしたり涙が出たり、こんちきしようと思つたり、そしてけつきよくにおいて、おかしくなつて笑い出すことがあつた。

兄のこのような行状は次第にはげしくなりつつ三四年もつづいた。伯母も伯父も、もちろん私も全くサジを投げてしまつた。それは人力を以ては、とうてい、せきとめ得ず、神さまの力でも仏さまの力でも、しよせんは阻止する事のできない程の勇敢さを以て続けられた。

そのうちに、たしか冬の事であつたが、或る日、兄の姿がヒョイと見えなくなった。同時に伯母の姿も消えた。誰にたずねても、兄と伯母がどこへ行つたか、わからなかつた。心配しながら一カ月ばかりをすごした頃、兄は伯母にもなわれてヒョッコリもどつて来た。ひどく痩せて、顔色が青白くなつていた。どこへ行つていたんだとたずねても、笑つて答えなかつた。なんどもくりかえして聞くと、「清水（キヨミズ）の山へ行つていた」と言う。

「なにしに？」

「滝にうたれて来た。つめたかつたぞう」

「伯母さんもうたれたの？」

「ううん、おれだけだ。伯母さんが、どうしても打たれると言うて、きかん。チエツ！ おれに

キツネがついていると言うとたい

「キツネ？ キツネがな？ 伯母さんがそう言ったの？」

「いや、ミコさんだよ。伯母さんが清水の山のミコさんに言ったんだ。この子は、かたわ者のくせに放蕩ばかりするのは、どうしてもフに落ちんから、よく占ってみてくれと言ったんだ。そしてたらミコさんに神さんがおりて、眼をこんなふうに釣りあげてな、こりや何とかのキツネが取りついとると言った。そいでキツネを落とすために滝に打たれた。つめたかった。ダーツと頭に岩がぶちあたるような気がする。そいからね、そいでもまだキツネが落ちるので、こんなふう立木に、グルグル巻きに俺をしぼって青松葉でくすべた。苦しかった。息ができません。えらい目に逢うた。ハハハ」

しかた話を入れて語り、他意の無い明るい眼の色で、心からおかしそうに笑った。そして最後に「キツネがついたとかなんとか言うなあ、しつきやあ（みんな）、迷信たい！」と言った。私はおどろきあきれ、やがて尊敬に似た気持でもって、そのいくらかキツネづらになった青白い兄の顔を見あげながら、言句に詰ったことであつた。

そんな目にあつても兄の行状は変らなかつた。ついにそれから、一年後、伯父や伯母その他すべての親戚たちから見離され、フロシキ包みを一個とバスケットを一個だけ持たされて、満洲に追いやられた。佐賀駅から出発する時に彼は三等車のブリッジに烏打帽をかむって立ち、プラツトフォームの私をマジマジと見ていたが、汽車が動き出すと、涙をポロポロ流し、その頬を右腕の着物の袖口で拭いた。

しかしすぐに、「じゃ行ってくらあ。すぐ帰って来るからね」と言つて、例のニコニコして見

せた。

しかし、それきり帰ってはこなかった。満洲で炭坑の事務員になって働き、連発銃を抱いてフンゾリかえっている写真を二度ばかりと、その土地でも相変らず、好きな女を作って通っているという噂を送ってよこしたきり、二十六歳で死んだ。急性の肺炎だったと言う。彼の女（又は女達）が、その後どこでどうしているか、ついに私は知らない。

その頃兄と私とは身心ともに、あまり似ていなかったが、しかし兄弟というものは、結局はどこかしら似るものと見えて、私はオトナになってから、行きずりにチラリとのぞいたショウウインドのガラスにうつった自分の横顔や、又は、陽光のかげんで地上に印した自分の影ぼうしなどに、兄のからだや顔とソックリの線を見いだしたりする事がある。そんな時にはハツとすると同じ時に、なつかしくて眼の底があつくなることがある。兄を青松葉でくすべたミコさんや伯母を、私は憎む。

8

私が中学校に入学したのはデタラメの結果であった。もちろん私自身のデタラメでは無い。私のような境涯にいた少年が自身のデタラメでそんな事のできるわけが無い。デタラメをしたのは伯父であった。

十四になった私は、土方や人夫達にまじってセッセと働き、時おりは勝次兄の乱行のために身のせまい思いをすることはあっても、周囲の人々は、この孤児に対してあたたかい気持をいだ

いてくれた。土方や人夫達の生活の空気は白山で、私の性に合っていた。私は自分の生活に不満を持っていなかった。その年ごろの少年としては当然な希望——がくもんをしたい欲望は有ったが、それは講義録をとるか本を買って一人で勉強すればよいと考えていたので、学校へ行こうなどとは夢にも思っていなかった。また、その当時（今でもそうだろうが）中学校に入学するなどという事は、金持ちの息子にだけ許された事であつて、持っているものと言つては毎日着ているタッタ一枚の着物と、その着物に包まれた壮健なからただけで、あとは、ただもう女に夢中になつて他の事をいっさい忘れてしまつている兄と、それから貧乏きわまる百姓か同じく貧乏きわまる小商人などの四五の親戚を持っているだけの孤児に、そのような特権を夢想することが、どうしてできたろう。

伯父は或る日のこと、その愛用の自転車にまたがつて外から帰つて来るや、材木部の店頭で働いている私をつかまえて「あさつて、県立中学の入学試験があるそうだから受けてみる」と言ひ、受験料の三円をくれた。私は伯父の真意をはかりかねて、しばらくの間、彼の顔を見つめていた。……もしかすると彼は実子を一人も持つていなかったので、行く行く私を養子にして自分の商売の後つぎをさせようと夢想したのかも知れなかった。しかしそれならそれで、もう少し前からそのように私を扱い、中学についても受験準備のすしぐらいはさせて置いてくれただろうのに、そんな事はさらに無かつた。まったく、だしぬけの話だつた。たぶん彼はたんに土木請負の親方らしく気まぐれに取りつかれた結果、たとえて言うならば自分の飼っているシャモを鬪鶏大会に出場させるような心もちで、自分のところに居る小僧を競争の最も激しい県立中学の入学試験に出場させて、金持ちの子供らと噛み合せてみたくなつたらしい。と言うのは、私の小学校

に於ける学業の成績は、幸か不幸か、かなり優秀なものであった。——それで無ければ、私が入学試験に通ってしまった時に、伯父があんなに迷惑そうな、けむたい顔をする筈が無い。

話が前後したが、私は、しかたが無いので、ヨレヨレの小倉のはかまをはいて試験を受けに行つた。シャモはシャモでも、それはなんという見すばらしいシャモであつたらう。身なりもだが、心もちも見すばらしかった。なぜなら、たとえ試験に通つて見ても、入学ができない事は、わかりきっていたから。

試験にパスしたから、これこれの日に登校すべしと言つた文句の書いたハガキをつかんだまま、伯父の顔をあおぐと、彼の顔はいつもの通りのぶちようづらをくずさないで、だまりこくつていた。私は泣きべそをかいていた。入学できないのが残念なためでは無かつた。伯父を迷惑がらせることが、すまなかつたのであつた。だから、最後に伯父が、ほとんど吐きだすような句調で、「受かつてしまったもんなら、しかたが無か。とにかく入学してしまえ」

と言いつつても、私の心はみじんもたのしまなかつた。

伯父は靴をいっそく買つてくれた。それをはいて私は次ぎの日から中学に通いはじめた。生れてはじめてはいたクツの、しかも出来合いのを買ったせいか、ひどく足を食つて、四五日たつと大きな豆がいくつもできて痛かつた。豆がつぶれると、がまんにもはいておれないので、クツは手にさげてハダシで歩いた。同級生たちは、まだ教科書もまんぞくには持つていない私を白い眼で見た。なさけ無かつた。小さな中学生は、うれしく無いことは無い。しかしどうしても、まわりの空気になじめなかつた。自分のからだのどこかを撫でられているような気がしながら、同時にべつのどこかをツネられているような気もちがした。毎日のように、なにものに対してだかハ

ツキリしないけれども、腹が立ってしかたが無かった。——私がそれ以来つねに、そして今でも、理智的にと言うよりは本能的に「金持ち」又は金持の子弟をきらいなのは、思うに、幼年時代から少年時代の自分の生活と気分根ざしているようである。と言うのは、これに似たような事情と、この時に味わった心理は、この時だけの事では無く、その後も、すこしずつ変った形で、それから、そのつど、はじめて嫌うような痛さとかからさで以て、私の上に何度も何度も起った。私がヤット一人前の中学生らしい気もちになったのは、靴ずれの豆が破れてピリピリ痛かったのが、すっかりなおりきって、ハダシで歩かなくてもよくなった頃からであった。

その後、約二年、伯父夫婦に気がねをしながら月謝その他の学費をもらって中学に通い、午後学校から帰ってくるや、カバンを投げだして土方や人夫に早変りをして働いて夜ふけに至るという毎日をすごしたが、ちょうどその頃が勝次兄の放蕩の末期にあたっていた。私は伯父夫婦にすまない気もちでいっぱいになり、ベンベンと中学に通っている事はもちろんの事、ただ単にこの家のメシを食っている事さえも悪いような、居ても立っても居られない状態になってきて、ついにこの家を出て行かざるを得なくなった。ふたたび私は宿無しになった。ただ今度は前の時よりも気も強くなり世の中の事もいくらかわかってきたせいか、自殺をしようなどとは考えなかった。いよいよこの家を出て行く時に、すこしばかりの学用品などを包んだフロシキ包みをかかえた私が、うす暗い材木置場の一隅に兄を見つけて、

「兄さん、俺は、ここを出て行く。兄さんも、もうあんまり遊ぶのはよしてくれ」

自分がこんな事になったのも、彼のためであるぞという意味をこめて言った。彼は悲しそうに眼をショボショボさせて居たが、



「そうか。……でも俺がすぐに金をもうけて、中学をつづけさせてやるよ。だからそれまで、なんとかしてがまんして居るんだな」と答えた。私は、あきれかえって、そこを出て行った。

こんども、私を拾いあげてくれたのは、もう一組の他の伯父夫婦であった。

佐賀市から西北二里ばかり離れた村の百姓で、持ち田がセイゼイ五段か六段の自作兼小作で貧しいという程では無いが、ゆたかでは無い。それに、子供が多かった。よぶんの人間を食客に置くなどの余裕は無かった。しかも私と血のつながっているのは、この家の主婦である伯母であつて、伯父の方は義理の仲である。ところが、ほかに行く先きの心あたりも無いままにそこへたずねて行った私の話を耳にするなり、ひどくあわれがってくれて、進んでころげこませてくれたのは、この伯父であつた。「うちには金は無かばってん、食うにや困らんけん、いつまでおつてもよかたい」と言うのであつた。

伯父に似て、一家の者は人のよい者ばかりだつた。七人のイトコたちも私をめずらしがって心からかんげいしてくれた。私はすぐに一家の素朴な空気に馴れ、三四日後には一同についてタンポや畑に出て百姓仕事の手つだいをやりだした。体力は土方仕事で出来ているし、田園の戸外で大人にまじつてユツクリ働らくことは、気もちが良かった。夏には田の草を取ったり、水田に水をあげる水車を踏んだりした。秋には稲を刈ったり、運んだり、それをこいたり調整したり、冬には稲の切株を掘りかえしたり、百姓仕事は季節と共に順序よく後から後からと、しかしけつし

て急がずに目の前にやって来た。……「もしかすると、土方をしたり材木屋の仕事よりも百姓の仕事の方が良い仕事かもしれんぞ」と私は思いはじめていた。いちばん安心してやれる仕事のよ  
うな気がした。もともと私の血液の半分は百姓のものであった。母かたの血すじは鍋島家の士  
家だが、父かたはふるい農家だった。――顔色が陽に焼けて赤黒くなりかけて来たころには、私  
には農事の手つだいがおもしろくなり、本気に身を入れてやりだしていた。中学などは、もちろ  
んやめる気で、ズツと通学もしないでいた。

「学校をやめたら、いかん。これから先きは人間、ガクが無くては出世でけん！」と言いだした  
のは、しかし、伯父であった。

私は、しゅっせなどしたくはなかった。第一、しゅっせをするという事がどんなことなのか、  
私にはけんとうが付かなかった。しかし、伯父は自説を固執してやまなかった。私はついに言い  
負かされてしまい、それに私がいくら百姓になってしまいたいと望んでも、一坪の田地を持って  
いるわけでも無かった。私は、しかたなく、再び、二里あまりの道を毎日歩いて中学に通いはじ  
めた。

この伯父が自説を主張したしかたは、当時の私にはもちろん、伯母その他の周囲の人たちにも  
理解のできない、すこしキチガイじみ見る位に激しいものであった。それは自家にころげこんで来  
た義理のオイに対するしんせつ気の域を、はるかに飛び越えたもので、ほとんど眼の色を変えて  
言い張った。もしかすると彼は、自分が村中から「土の虫」と呼ばれる程に五十幾年の生涯を文  
字通り田畑の中を這いずりまわって働きとおしに働いてきて、その過労の結果、今はすでに、そ  
んな年でも無いのに腰骨が弓のように曲ってしまい、七十歳であると言っても人があやしまない

程に古い疲れても、けつきよくは、やつと食って行けるだけの貧乏百姓にすぎないという事からを振りかえり、それと言うのも、自分が文盲で自分自身の名まえも書けないように「ガクが無い」事にそれらいつさいの原因が有るかの様に思い、そして彼の眼から見れば、かがやける学問の道に、せつかく足を踏み入れている私を、そこから引きかえさせたく無かったのもあろうか。それとも、彼がその田地を小作させてもらっているところの、部落の大地主の二番目の息子が、やっぱり私と同じ中学の同級生として通学しているのを見るにつけても、その「ボツチャン」と自分のオイが肩を並べて町の学校に通うという事を、貧乏百姓らしい虚栄心と夢と幻想とで以て眺めたためでもあろうか。

いずれにせよ私は、この伯父の中に、ほんとの「ドン百姓」の姿を認めた。ドン百姓としてのゆがんだ性質と共に、まるで士というものの化身でもあるかのような黙々たる忍耐力と、それから、およそ人に対して悪意というものを持つ事の無い——というよりも、持ち得ない善良さ。

朝早く、私とその地主の息子とがつれだつて町への道を歩いて行く、伯父はすでにその近くの田に出て働らいている事が多かった。彼がその折れ曲った腰を、地べたから、ひっぺがすようにして伸びあがり、地主の息子に向つて深く頭をさげた後で私の顔を見あげ「おお十郎、今学校へ行くかん」と言いながら、誇りと信頼に輝く眼で見送っていた姿を、私は忘れない。

その後、うき世のいろいろの波や風に吹き流されて東京に出て定住するようになった私が、チヨット郷里へもどる用事があつて、この伯父の家をたずねて行った事があつた。伯父は私の姿を見るや狂喜し、そして彼には以前から昂奮すると口がきけなくなる癖が有つたが、その癖を極端に發揮して、モガモガと口を動かし顔中を赤黒くひきつらせ、しまいに子供のようになつた私の手をつ

かんで「十郎にごちそうしろ！」と家中をわめきちらして歩いた。でも私は東京にすぐに帰らなければならぬ事情をひかえていたために、昼食をよばただけで一晩もそこに泊らないで帰京した。あとになって伯母や従姉などから来た手紙によると、伯父はこの事を残念がり、私が帰ってから一週間ばかりと言うもの、朝晩に家人に向って怒りちらし、「十郎は俺の家に一晩もとまらなかつた！ あああ！ お前たちがロクな物をたべさせなかつたけん！ ちきしよ！ 東京（彼はこれをトウキョウと言わないで、トウケイと発音した）でうまか物ばかり食いつけている十郎に、こぎゃん、こぎゃん、ドク塩んからか（ひどく塩からい）塩シヤケなんちゆうもん、食わせたけんたい！（食わせたからだ）塩シヤケば、食わせたけん、十郎は泊って行ってくれんかつたんだぞう！」

といきまき叫び、はては、その地方の習頂で、台所の火鉢の土の枯木に縄でつるしてあつた塩シヤケ——盆や正月に一匹丸ごと買い込んで、そこにつるして置いて、来客が有つた時などに、その一部分を切り取って食べる事になつて居る——そして、私もその時その舌のしびれるように塩からい一切れを食べさせられた——を引っぱりおろし、その塩でカチカチになつた魚を棒のように振りまわしてあばれながら、泣きぐるいをしたと言う。「うちのお父つあんが、あんなに泣いたりあばれたりした事は、見た事がありません」と従姉の手紙に有つた。

ありがたくも、また愛すべき、あわれなる伯父よ、あなたは知らなかつたのだ。あなたが、シヤケを振りまわしてあばれていた時に、この私は、「東京のうまい物」はおろかな事、一カ月も二カ月も、その塩シヤケの半切れでさえも口にする事の出来ない貧乏の底で、早稲田鶴巻町ガンコ食堂で、一杯三銭のメシと一杯二銭のミソ汁に、苦つづみを打っていた。



底本… 「三好十郎の仕事 別巻」 學藝書林

1968 (昭和43) 年11月28日第1刷発行

初出… 「独語風自伝」 早稲田文学

1938 (昭和13) ～1939 (昭和14) 年

※初出を加筆して、戯曲集『廢墟』の卷末に添付

入力… 伊藤時也

校正… 伊藤時也

2010 (平成22) 年12月7日